

令和3年度 東久留米市立

学校評価報告書

学校教育目標	○考える子 ○助け合う子 ○元気な子	【目指す教育】 『次代に生きる子供を育てる』	教育ビジョン	【目指す学校像】	『ともに生きる』心をもって実践する子供を育てる学校 ～一人一人が自分らしく輝くために～
			【目指す児童・生徒像】	人間味あふれ、自ら考え、自ら学ぶ子供	
			【目指す教師像】	人間味あふれる教職員 ～感性を磨く～	
前年度までの学校経営上の成果と課題		【成果】◇落ち着いた温かい支持的風土の学年・学級集団の形成 ◇児童の基本的な学習習慣・学習規律、規範意識の定着 ◇よりよい学校生活を目指して児童が主体的に行動しようとする意識の向上 ◇地域の人材や環境を生かした体験的活動の推進 ◇道徳科の授業研究の成果を生かした授業 【課題】◇基礎学力の定着 ◇教科横断的な学習指導 ◇児童が主体的に行動しようとする意識の向上 ◇特別支援教室との連携による特別支援教育、個に応じた指導の推進 ◇オリンピック・パラリンピック教育の推進 ◇効果的な組織運営			

東久留米市第2次教育振興基本計画				中期経営目標	短期経営目標	評価指標・評価基準		自己評価		学校関係者評価		次年度の方策
No.	四つの柱	基本施策	今年度学校で重点を置く「具体的施策」	(令和5年度までの3年間)	(1年間)	取組指標	成果指標	取組	成果	評価	コメント	
1	I 健全育成	個性を認め合う教育の推進	人権教育の推進	市教育委員会人権行動指針に基づき、自他を大切に、差別や偏見を許さない学校づくり。	全教育活動を通して、互いのよさや立場を尊重し合える心構えが育つよう努め、集団での自分の立場と責任を自覚し、互いに協力して行動しようとする態度を育てる。	・学校全体における言語環境の整備 ・学級活動などの実践的活動 ・学校行事等の学年の枠を超えた交流 ・人権教育の研修等とおした、教職員の人権感覚の見直し	「学校が楽しい」「暴力や相手を傷つけることはしていない」と答えた児童 A: 3.5以上 B: 3.2以上 C: 3.0以上 D: 3.0未満	A 3.6	A 3.5	A 3.7	・コロナ禍の中、コミュニケーションをとるのに苦勞があったかと思いますが、児童に向き合う教育に敬意を表している。 ・道徳教育の充実、思いやりのある行動と実践	・児童一人一人が認められる、互いのよさを認め合う学級、集団をつくる。 ・相手を尊重する言葉遣いや、暴力・暴言を許さない指導の徹底を図る。 ・人権教育の研修等を通じた、教職員の人権感覚の見直しを図る。
2	I 健全育成	規範意識や他人への思いやりなど豊かな心を育む教育の推進	規範意識と豊かな人間関係を育む教育	児童が互いに認め合い、児童と教師が信頼し合う豊かな人間関係を育み、規範意識や思いやりの心を育てる。	道徳科授業の充実、全教職員の共通理解のもと、「六小6つの『あ』」の指導を徹底し、基本的習慣や規範意識を育てる	・校内研をとおした道徳科授業の充実 ・道徳科の全体、年間計画の見直し ・「六小6つの『あ』」の指導の徹底	「相手の気持ちを考え、助け合って生活している」「六小6つの『あ』を守っている」と答えた児童 A: 3.5以上 B: 3.2以上 C: 3.0以上 D: 3.0未満	A 3.5	A 3.4	A 3.7	・六つの『あ』が伝統としてしっかり根付いているのが六小の長所の一つと思う。何でも相談できる環境づくり。 ・一人で悩まない、支え合って社会が成り立っているという認識を伝える。保護者も積極的に参加を望む。地域としても積極的に対応したい。	・「六小6つの『あ』」の指導を行い、全校での徹底を図る。 ・入学当初から生活指導の月目標等と関連させながら繰り返し指導を行い、基本的生活習慣と規範意識を育てる。
3	I 健全育成	いじめ問題への対応	いじめ防止対策推進基本方針に基づいた取り組みの推進	いじめ対策防止委員会によるいじめの実態把握と早期発見・対応を組織的に行い、いじめ防止のために自ら行動できる児童を育てる。	自尊感情や自己肯定感を高められる、児童一人一人が認められ、生かされる場活動の場、機会の設定、互いのよさを認め合う学級づくりを行う	・児童一人一人が認められる学級づくり ・児童アンケートの実施 ・児童会を中心にいじめ防止活動の展開 ・SCによる5年全員面接 ・教職員の週1回の情報共有	「学校はいじめがなく安心できる」「先生は、良いところや頑張っているところを認めてくれる」と答えた児童 A: 3.5以上 B: 3.2以上 C: 3.0以上 D: 3.0未満	A 3.5	A 3.6	A 3.5	・児童には良いと思いますが、保護者に対してのアピールは少ないと感じる。 ・今後も、校内でいじめが起きない環境づくりを続けてほしい。 ・いじめのない学校を目指していることが伝わってくる。先生方の取り組みが児童にも良い影響を与えていると思う。	・児童一人一人が認められ生かされる活動の場や機会を設け、互いのよさを認め合う学級、集団をつくることで、自尊感情や自己肯定感を高める。 ・代表委員会を中心にいじめ防止活動を展開する。(児童発信の防止活動の実施) ・教職員の週1回の情報共有内いじめ対策防止委員会によるいじめの早期発見と組織的対応を図る。
4	II 学力向上	確かな学力の育成	基礎的・基本的な学力の定着と学ぶ意欲の向上	学習活動や授業展開を工夫し、基礎的・基本的な知識および技能の確実な定着を図る。	「分かる、できる、楽しい授業、使える、つくる能力を育む授業」の実施	・授業改善推進プランの活用 ・算数習熟度別指導の充実 ・週3回(国語2回、算数1回)の朝学習実施、適切な評価 ・放課後タイムの実施	「すずんで考えたり発表したりできた」「友達と話したり、学び合ったりすることができた」と答えた児童 A: 3.5以上 B: 3.2以上 C: 3.0以上 D: 3.0未満	B 3.3	B 3.3	C 3.1	・基礎基本のさらなる定着のため、これまで以上に反復に力を入れてほしい。 ・タブレットを活用した新しい教育が定着することを願う。 ・基礎学力の向上にしっかりと取り組んでいる。	・授業改善推進プランに基づいて指導方法の工夫・改善を図る ・週3回の朝15分間を国語科、算数科の基礎的・基本的な学習の定着を図る。(年間) ・朝学習では、学習の土台となる「集中力」「粘り強さ」「達成感」を身に付ける。
5	II 学力向上	確かな学力の育成	教員の授業改善、指導力の向上の推進	学習活動や授業展開を工夫し、自ら学び、考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力(思考力・判断力・表現力)を育成する。	「学習者の基本は学習者の学習意欲」を授業の基盤と意識し、主体的・対話的で深い学びある授業改善を図る	・ねらいを明確にした授業の実施 ・授業の流れが分かる板書づくり ・一人一台端末を活用した一斉授業と個別学習を適切に組み合わせた学習指導 ・ICTを活用した様々なツールを駆使した探究的、協働的な学習の実施 ・自己評価、相互評価の工夫	「勉強がわかる」と答えた児童 A: 3.5以上 B: 3.2以上 C: 3.0以上 D: 3.0未満	B 3.4	A 3.7	A 3.6	・教科で先生が変わることは、子供も心強く楽しんでるようだ。放課後、学習の補充を怠っていない。	・児童にとって「分かる授業、できる授業、楽しい授業」、また、基礎的な知識や技能を活用した「使える・つくる」能力を育む授業を構築する。 ・各教科等で言語活動を充実させ、自分の考えをもち、双方向性の話し合い、学び合い活動のある授業を構築する。
6	II 学力向上	確かな学力の育成	家庭学習の積極的な展開	個々の児童の興味や関心に基づく自主的な学習を奨励して学習意欲を高め、家庭での学習習慣を身に付けさせる。	学年の発達段階に合った課題を与え、自主学習を奨励し家庭での学習習慣を育てる	・家庭で「学年×10+10分の家庭学習(宿題、自主学習)」に取り組んだと答えた児童 A: 3.5以上 B: 3.2以上 C: 3.0以上 D: 3.0未満	C 3.0	B 3.2	C 3.1	・高学年向けにさらなるタブレットの活用を検討してほしい。 ・子供の能力に合わせた方がよいと思う。 ・家庭での意識向上を期待する。 ・家庭学習は必要に迫らないとやらないことが多々ある。取り組みの難しさを感じる。	・全学年において「六小 自主学習の手引き」活用した家庭学習習慣を確立し、基礎的・基本的な学力の向上だけでなく、主体的な学習への取組姿勢、自ら学ぶ意欲等の生涯学習につなげていく。 ・学校だよりやホームページ等で取り組み状況を伝えることで、保護者の一層の理解と協力を得られるようにする。	
7	II 学力向上	確かな学力の育成	ICT機器活用等による多様な指導方法の工夫	問題を主体的に取り組む態度、一人一台端末やICT機器を活用してよりよい社会を築いていこうとする態度の育成を図るとともに、教科学習の学びの定着を図る。	論理的な思考の育成を図るとともに、個に応じた学習と学習の定着を図る授業を実施する	・一人一台端末やICT機器を活用した個に応じた学習指導 ・アンブレグドプログラミング学習の実施 ・プログラミング教育研修の実施	「問題を解決するために、自分の考えをもつことができた」「自分の考えを筋立てして、説明することができた」と答えた児童 A: 3.5以上 B: 3.2以上 C: 3.0以上 D: 3.0未満	C 3.1	B 3.2	C 3.1	・もっと活用できると思う。 ・持ち帰ってこないので、実態とよく活用しているのか見てみた。休みの課題にも活用できればと思う。 ・更なる推進を期待する。 ・対面授業の少なくなっている現状に不安を感じている。 ・情報機器を積極的に取り入れ、活用している点は、評価できる。プログラミング研修も充実するなどさらなる教員のレベルアップが望まれる。	・今年度の一人一台タブレット端末を活用した実践内容を各教科等の年間指導計画に記載する。 ・次年度は、記載した内容に基づいて実践、ブラッシュアップし、6年間を通して問題を主体的に取り組む態度、ICT機器を活用してよりよい社会を築いていこうとする態度の育成を図る。 ・ICTを含む様々なツールを駆使して、論理的な思考や探究のプロセスの育成を図るとともに、個に応じた学習と学習の定着を図る授業を実施する。
8	III 教育環境の整備	体験的な活動	地域や外部人材を生かした体験活動の充実	地域の人的、物的資源を活用した体験活動の充実を図り、地域社会の一員としての自覚と地域に対する愛情を育てる	各教科等の指導計画に基づき、地域人材や地域の特色を生かした体験活動を取り入れた効果的な授業を実施する	・地域資源を生かした授業の実施(各学年1回)	A: 3.5以上 B: 3.2以上 C: 3.0以上 D: 3.0未満	C 3.0	C 3.0	C 3.0	・コロナ禍において外部の方をお招きするのも中々困難なことと思う。 ・コロナ禍のため、評価が低いのはやむを得ないと思う。 ・コロナに合わせた活動が必要。 ・オンライン等を活用した交流も良いのではないかと。 ・地域との関わりが薄れていくのに将来的にも早急に対応してほしい。身近なところでできることを見つけ、対応していきたい。	・コロナ禍の中でできるような実施内容の工夫を図り、地域の自然や施設、人材等の地域資源を活用、協働した学習を行う。 ・授業公開や学校だより等で活動状況を伝えることで、保護者・地域の一層の理解を得られるようにする。
9	III 教育環境の整備	特別支援教育の充実	特別支援教育の充実	特別支援教育に対する理解を深め、個に応じた支援の充実、「共に生きる」仲間としての意識を育てる	インクルーシブ教育を視点とした教育の推進、特別支援校内委員会、生活指導部会を計画的に実施し、特別な支援を要する児童への個別支援の充実を図る	・特別支援教室巡回指導教員、聴覚言語学級教員による理解啓発授業を実施し、6年間を通じて「ともに生きる」仲間としての意識の育成 ・UDの授業の実施 ・校内研修会の実施 ・校内委員会の充実 ・生活指導部会の充実 ・特別支援教室、通級、通常級教員、SC等の連携の充実	「個に応じた特別支援教育が行われている」と答えた保護者 A: 3.5以上 B: 3.2以上 C: 3.0以上 D: 3.0未満	A 3.5	B 3.4	A 3.6	・インクルーシブ教育の推進をお願いします。 ・児童の人形成に役立つように進めてほしい。	・特別支援教育を主軸とした教育課程の編成をする。 ・特別支援教室、聴覚・言語学級教員による理解啓発授業を教科等の指導計画内に位置づけ、実施し、6年間を通して、特別支援教育について学ぶ。 ・全ての学級において、学習指導では、分かりやすい板書、学習のルールの掲示、ICT活用等、児童一人一人の教育的ニーズに応じた配慮や支援を行い、安心して学べる学級をつくる。 ・教員同士の情報交換や授業支援を密に行い、教員の特別支援教育のスキル向上し、個々の児童のニーズに則した支援を充実させる。
10	オリンピック・パラリンピックの精神を生かした教育の充実	4×4の取組	4×4の取組	オリンピック・パラリンピック教育を充実させるとともに、東京大会のレガシーを受け継いでいく意識を育てる	各教科や領域で4×4の取組を意識した活動を行い、スポーツ志向、障害者理解、日本人としての自覚等の「5つの資質」を養う	各教科を通して、 ・日本の伝統文化に触れる ・自国や世界の人々の生活や文化についての理解を深める	「オリンピック・パラリンピックについて学んだ」と答えた児童 A: 3.5以上 B: 3.2以上 C: 3.0以上 D: 3.0未満	C 3.1	A 3.5	C 3.1	・観戦を楽しみにしていた子供もいた。3学期の冬季オリンピック「パラリンピック」があるので、引き続き、冬季スポーツへの興味をもてるようにしたいと思う。 ・個性を発揮できるスポーツの観戦を提案する。パラリンピックの種目について、継続的に実施してほしい。保護者にも体験、理解を求めるプログラムを。	・オリンピック・パラリンピック教育実施後の、学校2020レガシーとして、特別支援教育を主軸とした教育課程の編成をし、互いの個性や多様性を認め合える人間の基礎を培う。
11	III 教育環境の整備	各学校におけるカリキュラム・マネジメントの推進	ライフ・ワーク・バランスの改善	教職員自身が教育の不易と流行を踏まえて校務改善等に取組み、ライフ・ワーク・バランスの改善を図る	教職員自ら健康を管理し、校務改善等を通して、作り出した自分の時間を、感性を磨くことにつかひ、教育活動に生かす	・職員夕会、職員会議の内容を精選、教員の業務時間を確保し、1か月時間外在時間45時間以内とする ・GIGAスクール構想のシステムを活用し、ペーパーレスを図り、教員の業務時間を確保する。 ・R-DCAPサイクルによる改善策の作成、引き継ぎによる効率化 ・教員自身が好きなこと、得意なことを見つけ、感性を磨く	1か月時間外在時間45時間以内でできた教員 A: 3.5以上 B: 3.2以上 C: 3.0以上 D: 3.0未満	B 3.2	B 3.2	C 3.1	・DX化を推進する等の教員の負担を減らす取組が必要である。	・一人一台端末の活用、校務支援システムの活用、会議の精選、時数の割り振りを工夫(期首、期末の午前授業等)し、勤務時間内で教材研究等に当たることができる時間をつくりだす。